はじめに

一九七二年、当時、私は北海道で、今も活動を続けているホレンコ（北海道マスコミ伝道デンター）で、放送伝道の専従者として働いて十年目を迎えていました。リスナーと出入りする若者たちのために、「サンゴ礁」というミニコミ誌を発行していました。その第十号のミニメッセージに、こんなことを書いています。

愛は道徳を超えたものである

「愛」のシリーズ、これが三回目ですね。第一回では、「愛」は道徳の一つではなく、全人格的なもの、その人の生き方自身を指すのだということ、第二回では、ムードとは関係がない、つまり、自分の心情から出て美化された善行ではなく、相手の正当でかつその時点にあったニードに自分がノッテヤルこと、別の言い方をすれば、無意識に行なって、それが相手に結果的に役立つことだ、ということを考えました。

さて、ここで「愛は道徳を超えたものである」ということを考えたいのですが、次の二つの聖書の言葉を比較して味わってみてください。

あなたがたは偽りを捨てて、おのおの隣り人に対して、真実を語りなさい。……怒ることがあっても、罪を犯してはならない。憤ったままで、日が暮れるようであってはならない。（エペソ四・二五〜二六）

（日本聖書協会口語訳聖書、以下同じ）

すべての無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また、いっさいの悪意を捨て去りなさい。互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるい合いなさい。（エペソ四・三一〜三二）

同じエペソ人への手紙の中で、この二つの箇所は矛盾していることを言っているように感じませんか？前の方は、怒りを肯定しているようだし、後の方は、怒りを否定しています。怒るということは、道徳的に言えば、よいことではありません。だから、文字の表面だけで考えれば、この二つの箇所は明らかに矛盾しています。　さあ、ここで私は言いたいのです。「愛は道徳を超えたものである」と。単に見た目での善悪だけにとらわれると、相手の人格（その時点だけではなく、将来も含めて）のための本当のニードに答えられない場合が起こるのです。そして、こっちは善を行なったという自己満足か、自己正当化が残り、悪者はすべて相手だと切ってしまう考え方が出ます。

昨年の六月でした。私は千歳の空港ターミナルから、夜おそく、千歳駅までタクシーに乗りました。

「駅まで！」

「駅かい！もの函館行きはないよッ」
　ぶっきらぼうな返事が返って来ました。以外に近い所なので明らかに不満だなとすぐに感じました。少し、気分をやわらげようと、
「不景気だね、……」と話しかけたのですが、相変わらず愛想が悪い。そこで千歳駅まで沈黙を守り、いざ料金の二二〇円を払おうとして財布を見ると、運悪く千円札しかない。おそるおそる、
「悪いなあ、千円札しかないんだけど…」と言って千円札を差出すと、思いがけない声がかえってきたのです。
「こまかいのぐらい用意しておけ！」
　今度は、私の方が頭に来ました。交番の前だったせいもあるのでしょう。よーし、このけしからん運転手は、交番と会社に知らせて、とっちめてよろうという気持ちになって、力いっぱい千円札を投げつけて言いました。
「なーに言ってんだ、つり銭用意するのは、てめえの方じゃないか！」（ケンカになると言葉も汚くなります）
　怒り過ぎたせいでしょうか、或いは、千円が惜しかったのか、どうか分かりませんが、とに角、そう言っておきながら、腰が上がらないのです。そのうち、彼は暗い中で、ふてくさりながらお釣りを数え始めました。
　（ちくしょう！持ってるくせに、何という太い野郎だ、少しはチップもやろうかと思ったが、こんな奴に渡せるか！きっちりお釣りをもらってやるぞ）
　そう心の中で思いながら見ていると、なるほど百円札があまりないようで、何か苦労しながら十円玉を数えているのが分かりました。何だか、少し気の毒な気も起こってきたのです。やっとお釣りを揃えて、十円玉を百円札の上に沢山重ねて私の手に渡そうとしたひょうし、どうしたわけは、二、三個の十円玉が運転席の方にころげ落ちたのです。
　その瞬間、私は、つい、「あッ、いい、いい」と言って、残っていた十年玉のかたまりを彼の手に返したのです。
　後で分かったのですが、数えてみると百円札が六枚でしたから、結果的に一八〇円のチップをやったことになります。不機嫌な運転手君もさすがに悪いと思ったのでしょう。
「すみません」と小声で言ったのです。こうなると、私もすっかり落ち着いて、持ち前のキザッポさが出てしまいました。お札を財布にしまいながら、落ち着いた声になって、
「誰でもイライラする時はある。だけどな、客に当たるのは俺だけにしとけよ」（ほんとうに、しょうもないセリフですね）
　この出来事をその日に乗った他のタクシーの運転手に話しました。
「お客さんは、暖かい人ですね」
　こう言われて、私は、むしろ、びっくりしました。もし、私がそのまま警察に乗り込んで、訴えたら、彼のこれからの仕事に非常に差し支えることになるのだそうです。「悪徳運転手」というレッテルが陸運局から貼られて、非常に苦しんでいる友だちの運転手がいるから、よく分かる、

とその運転手が言ってくれたのです。
　その晩、私はとてもさわやかな気分でした。千歳空港に行くたびにあの日の運転手はいないかなと探しています。といっても、あまり興奮したので、顔はよく覚えていないのですが…。でも、出来たら、会って、「その後はうまくいっているかい？」と肩を叩いてやりたい気持ちです。
　つくづく、先程の聖書の言葉を思い浮べました。

「怒ることがあっても、罪を犯してはならない、憤ったままで、日が暮れるようであってはならない」

　確かに、怒ることはあまりいいことじゃない、だけど、自分が本当によくないと感じた時に、正直にありのままぶっつけて怒るだけ怒れば、後は何も悪い気持ちは残らないし、かえって、相手のためになる。相手を救う、つまり、相手を愛した結果も出ることがある。いけないのは、自分だけで、処理したつもりで、悪いことは全部相手に押しつけたままで、しかも不愉快な気持ちをいつまでも残していることではないでしょうか？
　でも、間違えないで下さい。何でも怒りたければ怒ってもいいというものでもないのですよ。しかし、怒りの気持ちは、何らかの形で出しつくしてしまえば、かえって、相手に対する思いやりも出てくることがあるのだと言いたいのです。要するに、自分に正直で素直であるってことでしょうか。
　如何ですか？愛は道徳を超えたものだということ、幾分かは納得して頂けたでしょうか。

　今、改めて読んでみると、まだまだ若くて恩着せがましい、押しつけがましいところが、丸見えでちょっと恥ずかしいのですが、聖書の矛盾した言葉がそうでもないのだ、ということを体験した貴重な経験だった、と思っています。
　聖書は、道徳の教科書ではありません。あるいは、人生や信仰についての教えの書でもないのです。教えの書であるなら、こんな面倒なスタイルにしなくて、きっちり大切な教えをまとめておいてくれた方が、よっぽど読みやすいはずです。そして、教科書や教えの書と見るなら、とくに旧約では、教えにはならない話題に事欠きません。
　これに対し、仏教の教典（お経）は、完全に「教え」の書です。お経の中で、いちばん短いと言われる「般若心経」について、仏教界の大重鎮でいらしゃり、私も尊敬している松原泰道先生は、「般若心経入門」という本（祥伝社、昭和五〇年三月五日　一一一版、四二頁）の中で、このように言っておられます。
　「よく『名は体を表わす』というように、本文はわずか二百六十六字ですが、その一字一字に『ほとけ』のいのちが躍動しています。」
　しかし、聖書は違います。一字一句が、すべて「神のことば」と受け取るキリスト教もあるようですが、私の考えは、そのような見方は、聖書のひいきの引き倒しで、「聖書偶像主義」になるのではないか、と思っています。旧約は、教科書にするには、とても使えないような話題が山積

しているから、具合の悪い所は、飛ばして読むか、こじつけた解釈をして読むしかありません。だから、昔の教会では、旧約を持たないで、新約だけ持って行けば、よかったのです。

では、私は聖書をどう読んでいるかというと、「神のラブレター」として読んでいます。このことについて、「旧約聖書に強くなる本」の著者、浅見定雄先生の言葉を拝借しましょう。

「聖書は神さまから人類へのラブレターだと言った人がいますが、私に言わせれば、神さまはその時、相手のことを考え、思い切って同じ人類の仲間にラブレターの代筆と配達をまかせたのでした。」（浅見定雄「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局、一九七七年八月二五日、初版、一一頁）

手紙は、何か目的や用件があって、初めて書くものです。つまり歴史的事実があって、そのことを相手に的確に伝えるために、表現を工夫して書きます。人間が代筆していますから、それを書いた人の個性やくせが表れるのは自然なことです。神のラブレターを代筆した人は無数にいますから、色々な表現形式がとられるのもごく自然なことです。

ですから、聖書に書かれていることは、どんなに変わった（ヨハネの黙示録のような）表現がなされていようとも、必ず歴史的事実に基づいています。単なる空想の産物ではありません。
従って、聖書を読むためには、多少、予備知識が必要になります。こう申し上げると、聖書を読むのは、なんて面倒な、と思われるかも知れません。そのまま直接読んでもいいのですが、ひとつだけ注意してほしいことがあります。

想像力をめぐらして読んでください。手紙を読む場合と同じです。「何が言いたいのかな？」と文面に隠されている筆者の気持ちを汲み取る努力をしてほしいのです。誤解を恐れずに言わしてもらえば、文学として読むほうが、聖書の真意が伝わってくるように思います。つまり、文字面だけで、しかも「教え」として受け止めてほしくないのです。たとえば、創世記一章二八節に、

神は彼らを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」（日本聖書協会、新共同訳）
と書いてあるのを見て、「聖書にこんなことを書いているから、人口爆発、自然環境破壊を起こしたのだ。地球の危機は、聖書がもたらしたものだ」などと早合点しないで欲しいのです。このことで何を言おうとしているのか？とちょっと立ち留まってみてください。

私は、最初にも紹介しましたように、大したことはないのですが、ラジオ、テレビの仕事をしました。この業界の人たちは「ひとことで言ってください」とよく言います。たとえば、クリスマスの特別番組を作ろうとして相談すると、「伝えたいことは、どういうことですか？」と聞かれます。「神は愛だ、ということです」と答えると、「それじゃ分かりませんよ。我々に分かるように、ひとことで言ってください」と返ってきます。このおかげで、私はキリスト教に関係のない人に、キリスト教用語を使わないで説明する訓練をさせられ、これが非常にいい経験になりました。

「聖書には、何が書いてあるのか、ひとことで言ってください」と言われたら、「愛とは何かが、書いてあります」と答えます。この「愛」を定義するのは、たいへんむつかしく、無数の表現が

なされると思いますが、そのひとつとして、「愛」は、「想像力」である、としましょう。「愛は評価しないで、共感する」と言われますが、表面だけで判断するのではなく、隠されている気持ちに共感するには、想像力が必要です。聖書を想像力を働かせて読むことによって、現実に生きる愛が訓練されることになります。そのために、聖書は一見「不親切な」編集になっていると私は受け止めています。

想像力を働かせて聖書を読むと、実に面白いのです。面白おかしいという意味ではなく、うーんとうならされる面白さです。何とはなしに心がほのぼのし、よーしと勇気が湧いてくる面白さです。だから、たとえば無人島にひとりで送られることになって、一冊だけ本を持って行くことが許されるなら、もう五〇年くらい読んでいますが、躊躇なく私は聖書を選びます。

そこで、私は、私の乏しい想像力で聖書をどう面白く読んでいるかを、いくつかの例を挙げてご紹介しましょう。